有名な百人一首

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは
在原業平朝臣（ありわらのなりひらあそん）

田子の浦にうち出てみれば白妙の
富士の高嶺に雪は降りつつ
山部赤人（やまべのあかひと）

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身世にふるながめせしまに
小野小町（おののこまち）

しのぶれど色にいでにけり我が恋は
ものやと忍ふと人の問うまで
平兼盛（たいらのかねもり）

春すぎて夏来にけらし白妙の
ころもほすてふあまの香具山
持統天皇（じとうてんのう）

秋の田のかりほの庵の苫を荒み
わがころも手に露は濡れつつ
天智天皇（てんちてんのう）

瀬を早み岩にせかるる滝川の
われても末にあはむとぞ思う
崇徳院（すとくいん）

ひさかたの光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ
紀友則（きのともので）

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に井でし月かも
阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）

きみがため春の野にでて若菜摘む
わがころも手に雪は降りつつ
光孝天皇（こうこうてんのう）